

作物名：水稻

病害虫名：稲こうじ病（病原：*Villosiclava virens*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 籾にのみ発生する。乳熟期ごろから内外穎が少し開き、その隙間から緑黄色の小さな肉塊状の突起が現れ、しだいに大きくなって籾を包む菌糸塊（病粒）となる。
- 病粒は、はじめ灰白色の皮膜で覆われているが、成熟すると皮膜が破れてオレンジ色の厚壁孢子（写真1）が露出し、次第に籾を包むようになり暗緑色に変化する（写真2）。被害は登熟歩合の低下や、死米や乳白米の増加である。さらに、病粒の混入により品質が低下する。



写真1 発病籾

2 伝染源・伝染方法

- 第一次伝染源は、前年に田面に落下した厚壁孢子である。厚壁孢子は越冬後発芽して根に付着し、表皮細胞間隙から根内部に侵入する。侵入した菌糸は、表皮組織や維管束の間隙に伸展、葉原基と幼葉の表皮細胞に至る。その後、止葉葉鞘、出穂前の穎花に至り、穎内に侵入し花器を取り巻き、菌糸塊を形成する。菌糸塊に厚壁孢子が形成され、田面に落下し翌年の伝染源となる。



写真2 発病籾

3 発病しやすい条件

- 前年発生が多かったほ場では土壌菌量が多いため発生が多くなる。
- 出穂前 30 日間の多雨、穂ばらみ期の低温（15℃）、出穂期以降の高温（25～30℃）。

4 防除方法

（1）耕種的防除

- 田畑輪換により伝染源を断つ。
- 肥培管理を適切に行う。

（2）化学的防除

- 粉剤や粒剤により予防防除を行う。剤により使用時期が異なるので注意する。

5 出典

（1）参考文献

- 宮城の稲作指導指針【基本編】（宮城県）
- 農業総覧 病害虫防除・資材編1（農文協）
- 植物防疫 第72巻第7号:49-52（日本植物防疫協会）

（2）写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）